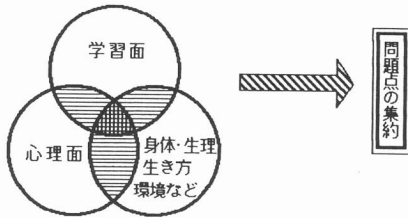


イ 心理検査からの問題点把握の仕方

心理検査は、それぞれの目的にそって実施するため、測定するものは、児童生徒の一面にすぎない。そのため、必要に応じて、何種類かの心理検査を組み合わせ活用することが大切である。

【図3】 心理検査による問題点把握



④ 調査・検査の活用例

以下は、本研究で使用した「YG性格検査」および「AAI学習適応性検査」の活用例である。

なお、結果の分析内容は、今回の調査対象者の範囲についてのみである。

調査対象

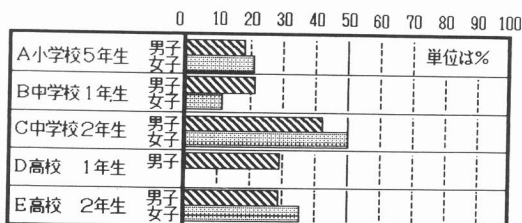
- A小学校5年生 41名
- B中学校1年生 37名
- C中学校2年生 43名
- D高等学校1年生 47名 男子実業高校
- E高等学校2年生 47名 普通高校 共学

ア YG性格検査

主に情緒不安定傾向を持つ児童生徒を把握するために実施した。

図4は、YG性格検査の「抑うつ性」「気分の変化」「劣等感」「神経質」の各因子得点が、高い(標準点が4または5のもの)児童生徒の学級に占める割合を示したものである。

【図4】 情緒不安定傾向を持つ児童生徒の割合

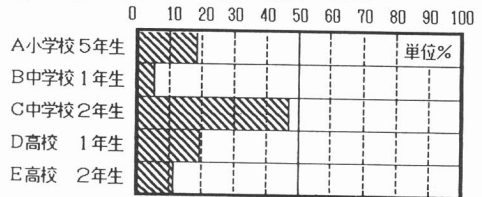


今回の調査においては、図4に見られるように学級のほぼ2割以上の児童生徒が、「情緒不安定傾向」を示していることが分かった。

イ AAI学習適応性検査

学習不適応の程度を把握するために実施した。図5は、AAI偏差値が1または2(学習不適応)と判定された児童生徒の占める割合を示したものである。

【図5】 学習不適応児童生徒の割合



今回の調査では、図5から、YG性格検査と同様に、学級のほぼ2割程度の児童生徒が「学習不適応」の状態にあることがわかる。

YG性格検査およびAAI学習適応性検査・YG性格検査の結果を照合し、さらに、研究協力校の学級担任の観察報告等から分析すると、一学級あたり、4名から9名程度の「指導援助を必要とする児童生徒」が存在するものと考えられる。

(2) 指導援助の効果の確認

① 基本的な考え方

図1で示したような、多面的・客観的な方法で指導援助の効果を確認する。

② 調査・検査の活用

- 同じ検査を実施する。
- 問題としたところを比較して、その変容を見る。
- 全員を対象として実施し、集団の変容も併せて見る。

③ 調査・検査の活用例

ア YG性格検査

個人の性格傾向の変容を確認するために実施した。